

子どもと共に創る生活

— 一期にふさわしい生活を求めて —

I 研究主題について

本園では、昭和47年から平成3年度まで「ひとりひとりを生かす保育」を主題に掲げて研究を続けてきた。

「ひとりひとりを生かす保育」とは、一人ひとりの子どもの個性的な表現（見方・感じ方・考え方・行い方）を支え、その子らしい、生き生きとした活動や生活の創出を支援することであった。そして、一人ひとりの個性をよりよく育てるために、子どもに自分で選択する力（遊び・活動形態・方法・場所・遊具・材料・時間）や、自分で遊びを追求していく力、友だちとかかわって遊ぶ力と共に、自然や人間の真理・善・美に対する感性と心情を発達の期に応じて培っていく意図のもと、具体的な指導のあり方を追究してきた。

こうした保育観をベースとして、平成4年度より主題を「子どもと共に創る生活」と改め、21世紀に向かって「生きる力」を育むための環境を新たな視野・視点から捉えることにより、上記のような理念の具体化に努めていきたいと考えている。

「子どもと共に創る生活」とは、子どもの立場から捉えるならば、子どもが自分の願いを主体的に実現させていく生活、つまり

- ・一人ひとりが自分のめあてをもって取り組む生活
- ・子ども自らが追求的に活動を展開していく生活
- ・充実感や楽しさのある生活

であるということができる。したがって私たちは、一人ひとりの子どもが本来もっている主体性と発達の特性を素直に表出するよう支え、保障していくことを保育の基底にしている。

一方、保育者の立場からは、一人ひとりの子どもを生活の創造の主体におきながらも、保育者の資質と指導性が「環境」として子どもの生活に影響していくという側面を重視している。したがって「子どもと共に創る」の意味は、子どもがみつけ、創っていく活動をもとにして、時期時期の発達に必要な経験を積み重ねていくことができる環境を構成し、その下で子どもの願い、興味関心・欲求をより望ましい発達に向けて実現できるように援助し続けていくことであると考えている。その営みの中で、子どもの主体性と保育者の主体性とが相互作用しながら、互いの個性が生かされた心豊かな充実した生活が創られていくものと考え、主題を追究している。

本園が追究してきた主題追究の経過は次のとおりである。

一人ひとりを生かす保育

第1年次～2年次	子どもの活動をみつめ直す	(48年度・研究紀要第12号 49年度・研究紀要第13号)
第3年次～4年次	連続的活動の姿をみつめる	(50年度・研究紀要第14号 51年度・研究紀要第15号)
第4年次～6年次	個と集団とのかかわりをみつめる	(52年度・研究紀要第16号 53年度・研究紀要第17号)
第7年次～8年次	期にふさわしい経験や活動	(54・55年度研究紀要第18号)
第9年次	期にふさわしい経験や活動 —「総合的な指導」の見通し—	(56年度)
第10年次	期にふさわしい経験や活動 —「総合的な指導」の視点から—	(57年度・研究紀要第19号)
第11年次	子どもの出方に即する指導性	(58年度・研究紀要第20号)
第12年次	子どもの出方に即する指導性 —「場面場面と指導性」—	(59年度・研究紀要第21号)
第13年次	—「自由な雰囲気と指導性」—	(60年度)
第14年次	「指導性」をみつめる	(61年度・研究紀要第22号)
第15年次	子どもの気持ちや動きに応ずる働きかけ	(62年度・研究紀要第23号)
第16年次	子どもの気持ちや動きに応ずる働きかけ	(63年度・研究紀要第24号)
第17年次	「子どもと共に創る生活」を通して	(平成1年度・研究紀要第25号)
第18年次	「子どもと共に創る生活」を通して	(平成2年度・研究紀要第26号)
第19年次	「子どもと共に創る生活」を通して	(平成3年度・研究紀要第27号)

子どもと共に創る生活

第1年次	子どもの主体性を探る	(平成4年度・研究紀要第28号)
第2年次	子どもの主体性を探る	(平成5年度)
第3年次	子どもがみつけていく遊びと発達に応じて構成していく環境	(平成6年度・研究紀要第29号)
第4年次	共有感を大切に	(平成7年度・研究紀要第30号)
第5年次	共有感を大切に	(平成8年度・研究紀要第31号)
第6年次～7年次	共有感を大切に	(平成9年度・10年度)
第8年次～9年次	期にふさわしい生活を求めて	(平成11年度・研究紀要第32号 平成12年度・研究紀要第33号)

II 副主題 期にふさわしい生活を求めて（第2年次）

1、副主題設定の理由

現代社会や家庭環境のめまぐるしい変化に伴う幼児の発達の現状を踏まえて、改めて次のような「生きる力」の基礎を育むことが保育・教育の現場に強く求められている。

「生きる力」とは

- 自分で課題をみつけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力
- 自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性
- たくましく生きるための健康や体力

近年の本園の子どもたちの発達の傾向を見ると、

- ・友だちとかかわる力や社会性の発達において個人差の幅が以前に増して大きくなっていること
- ・未経験のことに對して臆病であり、試行錯誤や失敗を恐れる子どもが多くなったこと
- ・トラブルや困難に出会うと、自分で問題解決をしながら遊びをすすめていく態度や力がやや乏しくなったこと
- ・文字・数字への興味関心の芽生えや、ことば・いろいろな知識の習得が早くなっている一方で、それらと生活・遊びの体験や実感との結びつきが弱くなっていること

など、さまざまな課題が捉えられるようになった。

このような、本園の子どもの実態やそれを取りまく社会、家庭の状況を受けとめ、次のような子どもの主体性の育成をめざし、保育に取り組んでいる。

本園のめざす子どもの主体性

- ・自分の願いや興味関心、意図や考えをもって遊び・遊具・場所・友だちをみつけていく意欲や態度
- ・「みつけた遊び」や自分のめあてを追求していく意欲・態度
- ・自分で身のまわりのことができ、共に生活していくために必要なことを自分で考えたり、問題解決していこうとする態度
- ・身近な環境に興味をもち、柔軟な適応性や協調性をもって自らかかわっていく心情・意欲・態度
- ・自分なりの見方・感じ方・考え方をさまざまな方法で表わしていく感性・心情・

態度

- 保育者や友だちの言葉、表現、考えを受けとめ、自分の考えやイメージを広げたり深めたりしながら、共に遊びや「学級で共有する活動」を創っていく意欲・態度

以上のような生きる力の基礎となる心情・意欲・態度を時期時代の生活の中で体験を通して培っていきたいと考えている。そして、幼児期の発達課題としての基礎基本は何か、また、時期時代の発達課題を充たす経験として最も重要なことは何であるのかを問い直し、「生きる力」と「心」を育むための教育課程の見直しをすると共に、保育の実際における教師の基本的な役割について探ることから、「期にふさわしい生活」を構想していきたいと考えている。

2、教育課程の編成と時期時代の「生活の構想」（指導計画）の基本的な考え方

(1) 教育課程編成における視点

① 発達の期を捉える

本園の教育課程は、下記の研究に基づいて、学年段階や学期、月による区別によらないで、子どもたちの成長・発達の節目の特徴を捉えた「期」を重視して編成している。

「子どもたちの成長、発達のすじみちをよくみると、年齢段階や学期の区切りによらない、時期時代の特徴を示している。こうした子どもの成長・発達のすじみちの節目節目に目を向けて、その前後とは異なった特徴をもった一定期間を「期」として捉えている。

「期のさかいめ」における子どもの行動は、部分的には重なり合っていて明確でない場合がある。それは、後の段階の萌芽が、前の段階に芽生えているからである。また、「期」が進んでも前の段階の特徴がすっかりなくなるのではなく、いくらか変質しながらも、かなりの期間残存しつづけているからでもある。

「期」の区切りは斜線で示している。これは、前の期の中に、後なる期の萌芽が芽生えたりして、さかいめを截然と引くことは実情に即さないからである。また、こうした表し方は、期の区分を一応のめやすとしてとらえ、固定的にみないようにする上からも大切である。

1981年「教育課程」初版発行一文責 玄田初榮（現昭和女子大学初等教育学科助教授）

「期」を捉える視点

発達期の特徴と変容の節目は、一人ひとりの発達のみちすじを追っていくことによって、個別のものと学級全体に共通しているものが見えてくる。私たちは、次の視点から時期時代の発達の特徴と変容を捉えている。

- ア、選択力（みつけた遊びにふさわしい材料・場所・遊具・方法を選ぶ力）
- イ、追求力（自分のめあてやイメージ・考え・意図をもって、みつけた遊びを連続的に追求し、工夫していく力）
- ウ、友だちとかかわる力
- エ、心情・態度（主体性・思いやり・学年にふさわしい態度）
- オ、知的関心

②季節の自然環境に目を向け、季節・自然の教育力を生かす

ア、季節と「遊びの経験的な内容」との関連に注視する。

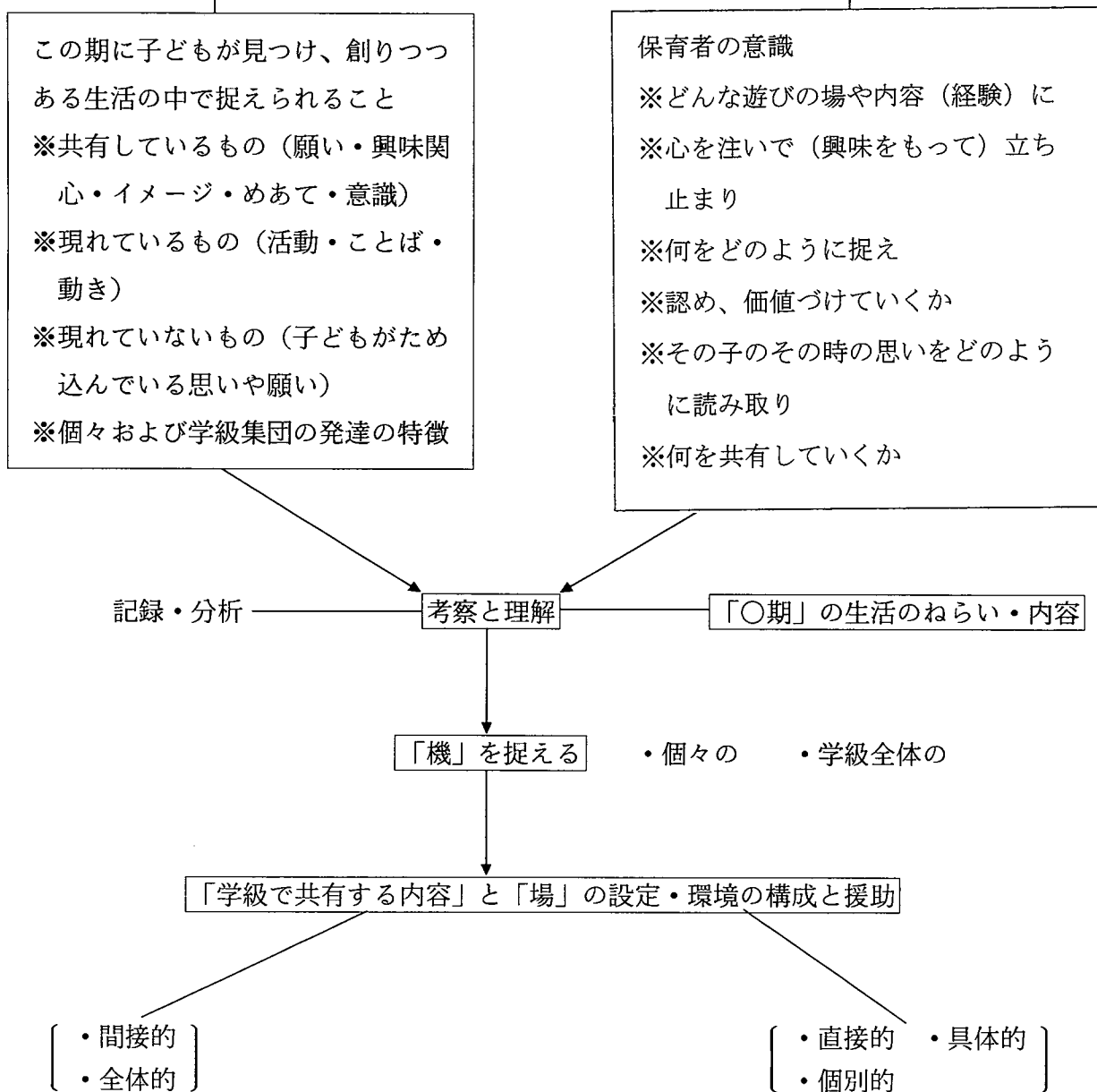
- ・自然の環境や場所をみつけて遊ぶ
- ・自然物を利用して遊ぶ
- ・生き物を見つけたり、採集して遊ぶ
- ・季節の変化や事象に気づいていく
- ・自然に対する感覚や感性を豊かにする

イ、季節の行事が、子どもの心の発達に与えていく影響に注視し、行事の教育的な意味を捉え直していく。同時に子どもが主体的に考えやイメージを持って取り組める活動として構成していく。

(2) 「生活の構想」の考え方

教育課程による、幼児の3年間の発達と、時期時代の生活の中での「経験や活動」の見通しを基盤として、さらに綿密な時期時代の生活を構想している。子どもが展開していく時期時代の生活の内容（子どもが活動を通して経験していることがら）を保育者がどのように捉え、意識し、援助していくかによって、その学級の生活の内容と流れが変わってくる。同時に、子どもに「期待する姿」すなわちその期の「ねらい」が変わってくる。私たちは、「教育課程」をベースとしながら、その年の担任と子どもたちとで共に創っていく生活のプロセスを大切にしている。

教育課程第〇期の生活の構想



「学級で共有する活動」とは

ある日突然に、一斉に、一様にではなく、個々のさまざまなプロセスをもちながら、次第に広がり、ふくらみ、深まり重なり合う意識や活動をいう。

「自分でみつけた遊び」と「学級で共有する活動」の一つ一つの経験や活動は、個々に切り離された形で帰結しているのではなく、子どもの願い・興味関心の共通性、活動や経験の連続性、相互の関連を通して結びつき「共有する活動」の内容として生きている。

「機を捉える」とは

「機」とは、子どもが展開していく生活の中で、時期時期に必要な経験をさせていくため

に、「それにふさわしい環境を構成するのに最もふさわしい時・状況・ことがら」であると仮定する。

「期にふさわしい生活を求める」ということは、子どもの時期時代の発達の課題を充たしていく経験的な内容を見きわめていくことから始めなければならない。そしてこのことは時期時代の生活の中で「学級で共有する内容」の選定と「場」の構成に深く関連することである。

「期」は、個々の発達において意味をもつ「時・状況・ことがら」が偶発的に与えられる場合と、その期の学級の生活の内容と子どもの経験をより充実させていくために、保育者が意図的に環境を構成していく場合の「時・状況・ことがら」の2つの視点から捉えることができる。

3、基本的な保育の姿勢と重視したい経験の内容

研究主題、副主題及び保育の課題を具現化していくために以下のことがらを保育の基本としている。

基本的な保育の姿勢

ア) 「自分でみつけた遊び」を生活のベースとして環境を構成していく

「自分でみつけた遊び」とは子ども自らが遊びの内容・場所・必要な物・道具を選び、一人で、または友だちと一緒に、自由に展開していく活動である。こうした活動を心ゆくまでさせることによって、一人ひとりの個性的な表出や表現（発想・イメージ・考え・ことば・動き）を促し、生き生きとした活動や生活を創っていく力（選択力・追求力・友だちとかかわる力・心情・意欲）を培っていくことができると考えている。一人ひとりの子どもがみつけたり、創っていく活動を個々の発達に意味をもつ経験となるように充実させ、次の「期」の発達の糧となるようにしていくために次のことがらを大切にしたい働きかけや援助をしながら時期時代の生活を構想し、「一日の生活」を組み立てていく。

- 子どもがみつけたものやことがらを教材として活動化していく。
- 子どもが創っていく活動の流れに注視し、その日の子どもの気持ちや動きに応じた個別的环境の構成や「学級で共有する内容」と「場」を構成する。
- 子ども同士の気持ちをつなぎ、友だちとのかかわりを支えていく。
- 発達の時期時代によって、子どもが展開する生活のリズムが異なることに注視し、できるだけ自然な生活の流れとなるように配慮する。（片づけ、集合の時間を固定化せず、全体の活動の節目を作るタイミングを考慮する。）

イ) 一人ひとりの幼児を理解し、信頼関係を築く

一人ひとりの子どもが活動を通して表現していることや、経験していることがらを捉えるとともに、その子の個性、発達の特性、心情や願いなど、多面的・経時的・総合的な幼

児理解に努め、幼児が心を開き、安心して遊べるよう信頼関係を築く。

ウ) 一人ひとりの発達の特性や個性が生きる「学級集団」を創る

それぞれの子どもの個性的な活動や表現を認め、互いに生かし合える学級集団の質を育てていく。また、同じ活動場面でも、個々の子どもの発達の特性や興味関心の違いによって、経験している内容が異なることに注視し（平成5年度・研究紀要第29号）、友だちとのかかわりの中で生まれてくる相互作用に目を向け、子ども同士のかかわりが意味をもっていくような状況や場を意識的に構成していく。

エ) 経験や活動の伝播や伝承性に目を向け、同年齢・異年齢の学級間のつながりと保育者同士の連携を大切にする

年長組が展開している活動を見たり、参加していく体験を通して、年少・年中組の子どもが同じようにして遊ぼうとしたり、次の年度に前の年の活動が受け継がれていくなど活動や経験の伝播・伝承によって子どもたちの生活の内容や経験がより豊かなものに成長していく。また、やさしさや思いやりなどの心情や態度など、異年齢のかかわりの中で育てていくものは大きい。こうしたことがらに目を向け、異年齢の子ども同士のかかわりを育てるため、保育者同士の相互理解による連携を大切にする。

重視したい経験の内容

ア、身近な自然の環境に興味関心をもち、四季の植物や生き物に自ら触れたり、それらを採集したり、飼育・栽培することを喜ぶ。

また、自然物（泥・土・水たまり・砂・草花・落ち葉・雪・氷など）に触れたり利用して遊び、さまざまな体験を通して感じ、考え、生き物や自然への親しみや愛情をもつ。

イ、保育者や友だちのことばをよく聞いたり、表現、考え、行動を見たり認めたりし、自分の考えやイメージ、表現を豊かにするとともに、友だちとめあてやイメージを共有し、協力して遊びを創っていく。

ウ、できないことや未経験のことに挑戦したり、粘り強く努力し、成就感や達成感をもつ。

Ⅲ 平成12年度の研究の概要

1、副主題 期にふさわしい生活を求めて（第2年次）

(1) 平成11年度の研究成果と課題

研究成果

現行の教育課程編成時から大きく変化してきているの子ども発達の様相、子どもを取り

まく社会・家庭生活の変化を捉えた。

そして、子どもが展開していった時期時期の生活の実際（経験内容）を捉え、「各期の生活の実際」の資料を作成し、これをもとに教育課程の一部を見直した。また、3、4、5歳児の発達の大枠の見通しを想定した。

課 題

新しい時代を見据えた教育課程の編成と実践を引き続き行うこと。また、より实际的、日常的な家庭との連携のあり方を求めていくこと。

(2) 本年度（平成12年度）捉えた実態

本園の子どもの実態

私たちは、近年の子どもたちの姿の中で、次のような育ちの変化や関連に特に注目した。

「友だちとかかわる力の育ち」

- ・友だちとかかわる力や社会性の発達において個人差の幅が以前に増して大きくなってきた。
- ・なかよくなった数人の友だちに対するこだわりが強く、仲間関係が広がりにくくなってきた。

「遊びを追求していく力の育ち」

- ・トラブルや困難なことに会おうと大人に依存したり、遊びの場から離れるなど自分（たち）で問題解決しながら遊びをすすめていく態度がやや乏しくなってきた。
- ・学級の友だちとめあてや課題を共有し、さまざまな考えやイメージを出しあったり、受けとめあったりしながら協力して物事を最後までやり遂げていく態度がやや乏しくなってきた。

家庭の実態・保護者の願い

「期にふさわしい生活」のあり方を探っていくためには、保護者の思い・願い・悩みなどを理解していくことが不可欠であると考えた。

これは、家庭との連携のあり方を考えていく基盤となるものであり、大きく変化している子どもたちの姿をどのように受けとめ、どのように環境の構成や援助をしていけばよいのかを考えていく上でも、重要であると考えた。

そして、全保護者対象にアンケートを行なったところ、一人ひとりの主体性や個性、同年齢・異年齢のいろいろな友だちとのかかわりを大切にしたい保育を望んでいること、そのような生活の中で、友だちの気持ちやよさを受けとめることのできる思いやりのある子どもに育てほしいと願っていることを捉えた。

以上のようなことを考えあわせ、私たちは「友だちとかかわる力の育ち」「遊びを追求していく力の育ち」に焦点をあて、研究をすすめていこうと考えた。そして、実践を通して捉えたことをもとに、教育課程の見直しも引き続き取り組んでいくことにした。

また、人と人のかかわりが希薄になりつつある現在、さまざまな人と連携して子どもたちの生活を支えていくことの重要性を改めて共通認識した。

2、研究のねらい

3年間あるいは2年間の課程を通して、各期の発達にふさわしい経験を積み重ねていく生活を子どもと共に創っていく。

3、研究の仮説

一人ひとりの子どもの発達の過程に目を向け、ふさわしい時期時期の生活に向けてさまざまな人との連携の中で環境を構成し、援助していけば、

- ・自分の願いやめあてをもって遊びを追求していく姿や力や
- ・いろいろな友だちの思いやよさを受けとめ、響きあって生活していく姿や力が育っていくであろう。

4、追究の視点

- 一人ひとりの発達の特性と課題を探り、活動の中で経験している内容との関連から、いま個々に必要な経験とは何かを明らかにする。
- 「学級で共有する内容」と「場」が個々の心情・意欲・態度にどのような影響をもたらしているか。
- 学級や学年の枠を越えた子ども同士のかかわりや相互作用によって、活動や経験がどのように広がり、深まっていくのか。
- 子どもと保育者と保護者、保護者同士が共有感をもって生活していくため、具体的にどのように連携し、環境を構成していけばよいか。
 - ・一人ひとりの子どもの発達の相互理解のために
 - ・園の生活や活動を共有していくために
 - ・子育ての喜びや時期時期の課題を共有するために

以下、P17より各論において上記のねらいと仮説に基づいて実践研究した結果をまとめた。

なお、文中の子どもの名前は全て仮名である。